

## 講演 情報って何？本って何？

### 1. 情報を伝えるメディアとは何か

—「情報になる」とはどのようなことか—

若松 昭子

#### はじめに

私の専門分野は図書館情報学です。図書館に代表される文化の蓄積・伝達システムだけではなく、私たちを取り巻く様々な情報メディアを対象として研究を行っています。皆さんも「情報メディア」という言葉はいろいろなところで聞かだろーと思いますが、普段よく使われる言葉でも一言で説明するのはなかなか難しいですね。そこで、今日は情報やメディアとはいったいどんなものかということを改めて考えてみたいと思います。ところで、「情報メディア」という語は、「情報」という言葉と「メディア」という言葉が一緒になっていますね。「情報」という概念は定義が少し難しいので、まず「メディア」というところから考えていきましょう。

#### 1.1 メディアの定義

「メディア」という語はラテン語の「メディウム」という語の複数形です。「メディア」を『広辞苑』<sup>1)</sup>で見ると、「情報を容れる器、情報を記録するためのもの」または、「情報を伝達する媒体や手段」と書いてあります。以前は「メディア」という言葉より、訳語である「媒体」という言葉が使われていました。これは古くは化学分野の用語として使われたりしていましたが、20世紀後半に情報学の分野で使われるようになったことで今では日常的に耳にするようになりました。私が学生の頃は、まだ「情報媒体」という語が使われていましたね。でも、「情報媒体」というのは少し難しいのかあまり聞かれなくなりました。最近では「情報メディア」という語の方が一般的です。また、上記のような理由

もあって「メディア」と「情報メディア」はほとんど同義に使われる傾向があります。

情報メディアには様々なものがあります。新聞も雑誌も、図書ももちろんのこと、ビデオテープとかCDやDVDもそうですね。皆さんよくご存じの「マスメディア」とか、「マルチメディア」という言葉もあります。「マスメディア」と聞くと何を想像しますか？ 思いついたものをちょっと言ってもらえますか？

新聞、そうですね。ええ、インターネットもテレビもありますね。また、テレビのニュース番組なども流れる形のものではありますがマスメディアと言えますね。要するに、マスメディアとは、大勢の人々に向けて情報を発信し伝達するものや方法や仕組みのことを言います。新聞、ラジオ、テレビなどは非常に多くの人に情報を伝達します。でも、「ラブレター」は、これは多くの人に向けてのものではありませんね。でも「あなたを好きです」という情報がある特定の人に伝えてくれますから、ラブレターも実はメディアなのです。ただ、マスメディアではないということですね。

マルチメディアという語も使われるようになってきました。これは文字、図形、音声、映像などが複合的な形をとって伝達される状態や仕組みのことです。インターネットの世界はこのマルチメディアの代表格と言えるでしょう。

## 1.2 情報の定義

情報とは何でしょうか。これもなかなか定義するのは難しいのですが、ここでは例として『図書館用語集』<sup>2)</sup>を見てみましょう。そこでは、情報とは、「事実、思想、感情などが他者に伝達可能な形で表現されたもの」と説明されています。ここでは、伝達可能な形でないと駄目ということになります。人々には「楽しい」とか「つまらない」などといった感情があります。しかし、もやもやしている段階で全く人に伝わらなかったら、この定義では情報ではないということになりますね。

では別の定義はどうでしょう。『大辞林』<sup>3)</sup>という国語辞典では、情報は「ある特定の目的について適切な判断を下したり、行動の意思決定をするために役立つ資料や知識」とあります。例えば、今日私が映画を見に行こうかサッカーを見に行こうかと迷っていたとします。偶然そこにあった新聞に今日はとても有名なサッカー選手が来るとでていたので、サッカーに行こうと決めます、そのサッカー選手についての記事は私の行動の意思決定をする上で大変役に立ちましたから、それは情報だということになります。

### 1.3 どこまで情報メディアか

自分の行動の意思決定に役立つものを「情報」と考えたときに、どこまで情報あるいは情報メディアと言えるのだろうかということを皆さんと考えてみましょう(図1-1参照)。先程、図書や雑誌や新聞、それからテレビなどもできましたね。その他にもこんなものがあります。「言葉」です。例えば、私は、今日はとてもお天気が良くて嬉しい、皆さんが来てくれて嬉しいと思っています。そうした感情を「嬉しい」と表現することによって皆さんに伝わります。ですから、「嬉しい」という「言葉」はメディアですね。「会話」もそうです。また単に「嬉しい」だけではなく、もっとまとまりのある「物語」、例えばこういうことをするとこんなハッピーな結末が待っている、といった形で伝えることもできますので、「物語」も情報メディアということになります。また、それらが記録されたもの、つまり「文字」や「文(文書)」も情報メディアということですね。

では、「あー」「うー」とか「おー」などの声はどうでしょうか。例えば、「今日飲みに行こうよ」と言ったときに渡辺先生が「おー」と返したら、これはもう当然ですけど「行くよ」という意味、しかも嫌々ではなく「喜んで行くよ」という情報を伝えてくれています。また、赤ちゃんの「あー」という声を聞きお母さんがちゃんとミルクを持って来れば、それはお腹がすいたからミルクがほしいという情報を発していると言えますから、声も情報メディアと言え

そうですね。

では、音はどうでしょう。「トントン」とドアをノックします。そうすると部屋の中にいる人は、ドアの向こう側に誰かがいて入りたいのだというのが伝わってきます。だから、「トントン」という音は情報メディアと言えそうですね。では、例えばこれはどうですか。台風るとき「ポタポタ」と音がするので慌ててそこに行ってみると雨漏りがしている、「やっぱりそうか、早く修理しなければ」と思います。「ポタポタ」と水が滴る音は、ちゃんと何かを伝えてくれますが、これは情報メディアでしょうか。「カランコロン」というのは、私が小さいころに祖母から聞いた話にでてきた音です。ある若者が幽霊と知らずに若い女性に恋をします。若者は相手の正体を知って驚くのですが、毎夜、その美しい娘さんは「カランコロン」という下駄の音をさせて尋ねて来るのです。すると、主人公はだんだん怖くなり「カランコロン」の音がしたら雨戸を全部閉めて部屋の中でじっとしているのですが、このときの「カランコロン」という下駄の音は情報メディアなのでしょうか。「リンリン」という自転車の音が聞こえたら、危ないですよ、後ろから自転車が行きますよ、よけて下さいということになりますね。では「リンリン」という音も情報メディアでしょうか。

### どこまで情報メディアか？

- ・言葉・会話・物語
- ・文字・文・文章
- ・声（あー、うー）
- ・音（トントン、ポタポタ、カランコロン、リンリン）
- ・動作（手招き・表情・視線・・・）
- ・物体（石・木切れ・鎖・信号機・・・）
- ・光・色（稲妻・花火・たいまつ・狼煙・・・）
- ・つばめ・蛙の鳴き声・花・樹木・雲・風・・・
- ・行為・歩き方・運転方法・生き方・・・???

図1-1 どこまで情報メディアか(その1)

さて、音ではなくて動作はどうでしょう。(手招きする、渡辺先生が来てくれる。)ほらね、何も言わなくても手招きだけでちゃんと来てくれますね。飲みに行こうって誘おうとして、行こうよという意味で手招きすると、渡辺先生も手を挙げてくれる、何も話さなくてもこれだけでも十分情報が伝わります。では、この手招きの動作は情報メディアと言えるのでしょうか。また、「表情」でも十分情報が伝わります。もちろん「姿勢」もそうですね。

さて、物はどうでしょう。例えば、「石」や「木切れ」や「鎖」というものがあります。例えば、昔読んだ漫画の中に、忍者が次にやってくる仲間の忍者に「石」を積み上げて何かを伝える、などという場面がありました。今では「鎖」でしょうか。道路に鎖がはってあったら、もちろん「紐」や「ロープ」でもいいのですが、その先へ入ってはいけなくと普通思いますね。つまり、「ロープ」とか「鎖」というのも十分情報を伝えていますが、これらは情報メディアなのでしょう。

さらに「光」とか「色」はどうでしょう。例えば「稲妻」、ピカッと光るとその後にゴロゴロという音が聞こえます。もうすぐ夕立が来そうなので今日は早く帰ろうと考えます。行動の意思決定をするのに「稲妻」は十分役立っていますが、これも情報メディアでしょうか。「花火」は、私が小学校の頃は、遠足や運動会の実施を知らせるために朝早く打ち上げられました。雨が降ったら中止になるのですが、だいたい聞こえる範囲に学校がありますから、朝の6時に花火があがれば予定通り遠足や運動会を行うというものでした。もちろん朝ですから綺麗な花火が見えるわけではありませんが、花火の音を聞いて私達は運動着に着替えて学校へ行ったものです。経験された方はいらっしゃいますか？ あら、学生の方たちも経験されているんですね。今はインターネットや携帯電話があるので、花火はほとんど使われていないと思っていましたが、皆さん同じ経験をされているのですか、それは嬉しいですね。「松明(たいまつ)」はどうですか？ 例えば、海を挟んで向こうの島とこちらの島で、もちろん声も届かなければ手を振っても見えませんので、準備が整ったら向こうで松明を上げまし

よう、そしたら攻め込んでください、などといった映画のシーンもありそうです。遠くで「松明」や「狼煙(のろし)」が上があればそれは何かの合図ということです。攻めろという合図かもしれないし、逃げろという合図かもしれないけれども、煙でも時には命に関わるような重大な情報を伝えてくれる訳です。では、これは情報メディアでしょうか？

このように考えていくと、更にどんどん広がっていきますね。例えば、「燕」です。燕が低く飛ぶと雨がもうすぐ降る、ということを言う人がいます。そうすると、明日雨だから農作業をしなくていい、もしくは明日雨だから他の作業の準備をしようなどと思う訳ですね。つまり、燕の飛ぶ様子は私たちの行動を判断する材料を提供してくれることになりますが、これも情報メディアでしょうか？「花」や「木」はどうでしょう？花が咲けば春の到来を、紅葉は秋の到来を教えてくれます。「雲」とか「風」もそうですね。雲が黒くたちこめてあたりが暗くなれば、もうすぐ雨になるから早く帰ろうと思いますし、洗濯物を取り込もうとか思いますね。では、雲とか風とか、これは情報メディアでしょうか？

更に、「人の行為」、「歩き方」、「運転方法」などを考えてみてください。例えば、うなだれて歩いている人がいます、そうすると、あの元気がないけど失恋でもしたのかな、それとも試験の成績が悪かったのかなとか思います。また、いつもはおとなしい人が車の運転になると乱暴で目の前の車がもたもたしているとすぐにクラクションを鳴らす、あの人本当は短気なのかな、などとそれなりの情報を伝えてくれます。こうした「人の行動」や「人の生き方」も情報メディアと言えるのでしょうか。このように考えだすと、全てが情報メディアと言えそうな気がしてきますね。

#### 1.4 情報と組織化

「情報」や「情報メディア」の捉え方は研究者によっても異なり、厳密な合意というのは実は得られておりません。しかし一般的には、「誰か」が「何か」

を「他の誰か」に伝える際に、伝える側と受ける側の間でその仲介をするものや方法や仕組みがあり、その仲介物が情報メディアであるとみなされています。例えば、「私」が「電話」を使って「清水先生」に「食事に行きましょう」と言います。「言葉」とか「電話」というメディアを介して、「一緒に食事に行きたい」というメッセージが「私」から「清水先生」に伝わることになります。この時重要なのは、伝える側と受ける側の間には、言葉の意味を理解できること、そして電話の使い方を知っていることが前提になっているということです。こうした共通の約束事の上で情報メディアは初めてその機能を発揮することができるわけです。情報を伝えるためには、なんらかの準備や加工が必要なのです。言い換えれば、情報も、情報メディアも、伝達を意図した組織化が必要だということです。このような観点から、雲や稲妻といった自然や自然現象は情報メディアとは一般にみなされないのです。

## どこまで情報メディアか？

言葉・会話・物語

文字・文・文章

声（伝達を意図した声・意図しない声）掛け声

音（意図した音・意図しない音）→ モールス信号・音楽

動作（意図した動作・手招き・表情・視線・・・）→ 手話

物体（石・木切れ・鎖・・・）→ 信号機・標識

光・色（稲妻・赤色・花火・たいまつ・のろし）→ 絵画

つばめ・蛙の鳴き声・花・樹木・雲・風・・・ → 気象情報

行為・歩き方・運転方法・生き方・・・ → 人物情報

図1-2 どこまで情報メディアか(その2)

これまでの事柄を整理すると図1-2のようになります。下線つき斜字で示したものは、組織化のレベルが高い情報メディアです。下線なし斜字で示した「おー」や「トントン」といった、誰かに何かを伝えるために発せられ用いられた

「声」、「音」、「動作」、「物」、「色」も、情報メディアと言えます。ただし、下線つきのものほどは、組織化のレベルが高くはないということですね。しかし、「音」も高度に組織化されると例えばモース信号のように正確で多くの情報を伝えることができます。また「音楽」も非常に組織化のレベルが高い情報メディアです。先程の「意図した動作」や「手招き」、「表情」なども情報メディアと言えますが、それが更に進むと「手話」のように高度に組織化された形が生まれてくることになります。

同じように、単なる「石ころ」「木切れ」でも、何かを伝えるために使われる場合は情報メディアということになります。それがより組織化され記号化されたものとして「信号機」や「標識」などがあります。「色」や「光」なども組織化のレベルが高くなると、「絵画」や「写真」などになります。

斜字以外の部分(図1-2参照)は、情報メディアとは通常はみなされません。「稲妻」によって、私達はもうすぐ雨が降るかもしれないということを察知できますが、稲妻が何かを伝えようとしている訳ではありませんから、情報メディアとは言えません。雨漏りの「ポタポタ」という音も同様です。また、「花」や「木」や「雲」など、それぞれの自然物や自然現象は確かに私達に何かを伝えてはくれますが、それ自体は情報メディアとはみなされません。しかし、そうしたことを詳細に調査し組織化すると、「気象情報」という立派な情報になります。同じように、「人の行為」「歩き方」「運転方法」「生き方」なども、それ自体は情報メディアとは普通は言われませんが、そういうものも全部集めて組織化されれば有用な「人物情報」になります。このように、私達が通常「情報メディア」と言うときには、下線つき斜字の部分(図1-2参照)をイメージしていることが多いのですが、実はいろいろな種類があり、レベルもまちまちだということがわかるでしょう。



## 1.5 情報メディアの分類

情報メディアには、いろいろな分け方がありますが、それらはメディアの特性を理解する上で役立ちます。ここでは3つ挙げてみました。まず、記録されているか、いないかという視点で分ける方法です。情報の記録や保管のために用いられるものは「記録メディア」と呼ばれます。録画や録音の技術が普及していなかったころは、視聴者にとってテレビやラジオから流れてくる情報は一過性のものでした。記録された情報は、私達が死んでしまった後も、次の世代、またその次の世代へと伝えることができます。また、遠くの、たとえ地球の裏側にいる人々にも伝えることができます。何度も繰り返して閲覧もできます。時と空間を超えた情報伝達が可能であるという理由から、記録情報は非記録情報にくらべより永くより広範な影響を与えることができると考えられています。

持ち運びができるかどうかという観点から、携帯可能なメディアと形態不可能なメディアに分けることもあります。携帯可能なメディアの方が、人々にとっては断然便利ですね。携帯不可能なメディアとしては、壁画とか石碑などがあります。王様や偉人などの墓石にも、生前の業績などがいろいろ記されています。それらは重くてなかなか持ち運ぶことはできませんが、実物に近い形で持ち帰りたい場合には、拓本といって、石碑の表面に紙を貼りつけ水で湿らせてその上から墨をつけ写し取ることになります。これは手間と時間がかかる大変な作業ですね。

大量複製が可能か否かで分けることもあります。石碑や壁面などの大量複製は困難ですが、新聞や雑誌は大量複製が容易です。大量複製可能なメディアは、より多くの人に情報を伝達することができ、それだけ人々への影響力は大きいと考えられています。コンピュータの登場によって、大量複製はさらに容易になってきていますから、それだけ社会への影響は大きくなっているということが言えるでしょう。

## 1.6 情報メディアの歴史

人類の歴史上で、情報コミュニケーションの大革命は3回あったと言われています。1回目は「言語を使い始めた時」、2回目は「文字を使い始めた時」、3回目は「印刷術を発明した時」です。

言語は様々な情報を伝えることができますが、記録を伴わない時は一過性のメディアです。今では録音することができますから状況は違いますが、録音技術はもとより、文字もなく記録ができなかった時代には「記憶」に頼るしかありませんでした。記憶に残るようにするためにはそれなりの工夫が必要で、歯切れの良い言い回しが考案されました。例えば、「五七五七七」といった調子です。ね。「もしもし亀よ、亀さんよ、世界の中でお前ほど、歩みののろい者はない、どうしてそんなにのろいのか・・・」。こうしたリズムカルな文なら覚えやすいですね。同様に、「昔々あるところにお爺さんとお婆さんがおりました。お爺さんは山へ芝刈りに、お婆さんは川へ洗濯に・・・」などの語り口調も、歯切れが良いのでお話を容易に覚えられます。このようにして、語り継がれる文学、つまり口承文学というものができてくるのです。民話や昔話などは、祖父母から父母へ、父母から子へ、子から孫へと何世代にもわたって伝えられてきました。本日の午後の部では、紙芝居で鬼のお話を楽しんでもらいますが、鬼は民話や昔話の中によくみられるキャラクターです。

「文字」の登場も、大きな情報コミュニケーション革命でした。これは、記録が可能になったということで画期的でした。文字は、古いものでは紀元前5000年頃のものが見つかっています。その頃には紙のような便利なものはまだありませんでしたから、文字は石や粘土などに刻まれています。紀元前1500年頃には漢字が考案されてきます。「亀の甲羅」や「骨」に刻まれた文字が見つかっています。

活版印刷術は、15世紀中頃にドイツのグーテンベルクによって開始されたとされています。「言語」や「文字」とくらべ、「印刷」がなぜそれらに匹敵するほどの革命なのかと不思議に思われるかもしれません。しかし、活版印刷術

は、人々のコミュニケーションスタイルに大きな変化をもたらしました。印刷は木版画でも出来ますが、一つの板に多くの文字を彫るのに対し、活版印刷では一つ一つの金属活字を組み合わせで様々な文を作ります。組み替えが容易なので修正や訂正も簡単にでき、印刷費も節約でき、また迅速に大量に刷ることができるようになりました。活版印刷術の普及に伴って書物の大量生産が実現したのです。

その後、長い間、印刷された書物、つまり紙メディアによって私達は情報を受けとったり、交換したりしていましたが、19世紀後半から更に新しいメディアが加わりました。写真、映画、またラジオ、テレビ、電話などの視聴覚メディアが19世紀末から20世紀初頭にかけて登場します。20世紀後半にコンピュータが登場したことはさらに大きな衝撃でした。コンピュータによって、蓄積できる情報量や一度に扱える情報量も飛躍的に増大しました。通信システムと結びついて、コンピュータ・ネットワークも普及しました。人々は、これを情報コミュニケーションの4度目の大革命と見なすようになりました。私たちは、まさに大革命の真ただ中にいることになります。

## おわりに

現在、私達は、様々な種類やレベルのメディアに囲まれて生きている訳ですね。こうした状況のもとでは、必要かつ適切な情報をどのように入手するかということがこれまで以上に重要となってくるでしょう。それには、情報を見分ける力や上手に活用する力を身につけることが肝要です。そのためには、多様なメディアのそれぞれの特性をまず理解することです。そこで、本日の午後の部においては、身近なメディアの一つである「紙芝居」や「音楽」を楽しんでいただき、それをヒントにして皆さんにもオリジナルな情報を作り出してもらおうと考えました。そうした実験を通して、情報やメディアというものをいつもとは違った角度から考え理解を深めていただければと思います。

## 注

- 1) 『広辞苑』 新村出編．第6版．岩波書店．2008．3049p. (2冊)
- 2) 『図書館用語集』 日本図書館協会用語委員会編．改訂版．日本図書館協会．1996．364p.
- 3) 『大辞林』 松村明編．第2版新装版．三省堂．1999．1冊